

# 横浜市立日野南中学校 平成28年度 学校評価報告書

重点取組分野	平成28年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	校内授業研や小中一貫教育推進ブロック授業研で積極的に授業公開し「わかる授業」を目指します。英語科、理科においてTTの指導を取り入れます。アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた主体的・能動的な学習活動を展開するよう努めます。後期前に生徒による授業評価を実施し集計結果をもとに魅力ある授業に向けて授業改善を行います。	「わかる授業」については約8割の生徒が肯定的な回答をしています。しかし、視聴覚機器や教材等は各授業で工夫されてはいますが、まだ取組が少ない教科も見られます。基礎・基本の習得とアクティブ・ラーニングを取り入れたバランスの良い学習活動を展開していくことや、机間指導やアドバイスを充実させ質問のしやすい授業環境を作っていくことも課題です。今後も授業評価を実施し、授業改善を行います。	B
豊かな心	道徳・各教科の授業を通じての「人権教育」「障がい理解教育」「高齢者理解教育」「国際理解交流」「人権作文」「いのちの授業」などを通して、この世にさまざまな立場の人が存在し、精一杯自分の人生を生きていることを認識し、互いの思いを尊重しながら行動できる生徒を育成します。	道徳・各教科の授業や、「障がい理解教育」「高齢者理解教育」「国際理解交流」など外部から講師を招いての講演等を通して、自他共に大切にすることを心で育成に努めました。今年度から始まった「いのちの授業」も一定の効果が出ていると考えられます。今後は、道徳の授業をより充実させ、自己肯定感を高め、互いに尊重しながら行動できる生徒の育成を目指します。	A
健やかな体	健康安全・体育的行事や旅行的行事などの事前学習や振り返りで、自他の健康や安全を守る姿勢を意識させます。新体力テストを通して、自己の体力を知り、課題を解決するための実践力を身につけ、運動に対する理解を深めるとともに、運動に親しむ資質や能力を育てます。	授業や行事、個別の生活指導等で、運動や食生活が健康な体づくりには大切であることを重ねて指導しました。運動に関する体力は平均以上ですが、運動経験の少ない生徒や、健康に自信を持ってない生徒が多く見られました。生活習慣の見直しや、体育的活動中に長所をほめて励ますなどして、運動への興味や健康な体づくりへの意欲を高めていきます。	B
生徒指導	日々の道徳教育や各種体験活動を基盤として、適切な人間関係の確立や自己有用感の醸成に努めます。委員会活動や体育祭・芸術祭などの学校行事を通して、生徒相互の協力性や連帯性を培います。生徒や保護者との信頼関係をベースに相談活動を充実させ、学級経営や授業を通して一人ひとりの存在を大切にし、心から他を認め受け入れる人間性を育てます。	広報活動の充実により、生徒会活動(委員会活動含む)や学校行事について活動が広く周知され、肯定的な結果につながっています。今後も生徒の主体的な活動を推進し、適切な人間関係の構築や協力性、連帯性を育みます。また、学校生活に安心を感じていない生徒への、信頼関係を基にした相談活動や生徒理解・指導がさらに進むよう努めます。	A
特別支援教育	特別支援教育担当を中心に、支援を必要とする生徒の教育的ニーズを把握し、支援チームを整え本人や保護者を支えます。必要に応じて外部機関と連携し支援を進めます。特別支援教育に関する研修を行い、生徒理解や特別支援教育に関する職員の理解を進めます。	スクールカウンセラーや外部機関との連携など、支援を必要とする生徒の理解や支援は、着実に進みました。今後も個別的教育指導計画の作成と活用を進め、情報を共有しながら、生徒を支援します。また、職員の研修をより充実させ、生徒の特性を理解し良さを伸ばすよう努めます。	B
地域連携	夏祭りや防犯活動などの地域行事に対して、学校が協力できる形で、生徒や職員が参加できるよう連携します。朝のあいさつ運動や地域の方による校内巡回・見守り活動を通して、生徒のようすや学校の取組を直接地域の方に伝えます。	生徒会活動や部活動などによる地域行事への参加に加え、生徒参加型の地区懇談会の実施によって、多くの生徒が地域の方と直接、意見交換することができました。また、朝のあいさつ運動や校内見守り活動に、多くの方に参加していただき、学校への理解を深めていただきました。各種情報発信の強化も行いました。今後も、生徒と地域の方との直接的な交流を進めます。	A
人材育成・組織運営	「指導力を身につけ充実させる段階」「ミドルリーダーとして業務の実行主体となる段階」「グループを掌握し学校運営に参画していく段階」という三段階での研修・実践を年数回ずつ行い、各段階の職員の成長を促します。研究部ごとに具体目標を設定し、実現のための振り返りが随時できるよう、PDCAサイクルを活用して組織の活性化を図ります。	段階を意識して、互いを高め合う活動を推進することはできましたが、全職員集団での研修が中心となり、グループごとの研修を実施するところまで高めることができませんでした。研究部の活動、振り返りを充実させ、活性化させることが今後の課題です。能動的で活発な運営が行われるよう、働きかけを強化します。	B
ブロック内相互評価後の気付き	・年2回の小中合同研修会では、9年間を見通した児童生徒指導の在り方について意識を持ちながら、授業参観・意見交流を行った。上級生になるにつれ、学習に取り組む姿勢ができていたことが認められた。 ・教職員の一方的な講話の授業が多く、各学級の受け入れ素地ができてきた今、アクティブラーニングをもっと意識した授業展開と共に、その時の生徒の動かし方など、さらに研修機会を深めていくことが課題である。		
学校関係者評価	・校舎内を見ても生徒は落ち着いて学校生活を過ごしており、また、授業もわかりやすく工夫して行われている様子が見えたことは、全般的に安心できる。 ・生徒も参加した懇談会はとてもよい機会であり、その後、校外で挨拶を交わせるようになるなど、よいきっかけとなった。さらに参加生徒が増えると連携が一層深まると考える。 ・いじめ防止についての取組・活動を、プライベートに十分配慮しながらもう少しオープンにしていけると、一般生徒にも広く伝えられ、浸透できるのではないかと感じる。		
学校経営中期取組目標振り返り	・小中合同研修会、相互評価など、ブロック中学校の連携は一層密になり、小中一貫教育の具体的な実践が進んだ。 ・重点取組分野を校内教育課程委員会で策定するとともに、担当部署を明確にすることで、教職員が学校経営に積極的に参画し、具体的な取組への意欲が向上した。 ・保護者、生徒からの評価と学校関係者からの評価はともに高くなり、新たな中期学校経営の一年目の目標は達成できたと思える。 ・校内推進体制を再検討し、人権教育実践推進校二年目として人権教育の成果を示したい。		